

平成30年度 足利中央特別支援学校 学校評価結果

評価基準 A:達成できた(80%以上) B:概ね達成できた(50～79%) C:あまり達成できていない(20～49%) D:達成できていない(19%以下)									
重点目標	推進担当	達成目標（評価項目）	評価の観点	教職員自己評価	保護者アンケート	総合評価	考察	改善策	学校関係者評価委員会における意見と改善策
1 防災体制の充実を図るとともに、防災教育、安全教育を推進する。 ○各種訓練や安全学習・安全指導の充実を図りながら、児童生徒が自らを守るために必要な判断や行動ができるようにする。	健康指導部	・事前学習を行い、実態に応じた個人の目標を設定し、訓練後、振り返りや評価を行うことで、防災（主に地震）に関する判断や行動ができるようにする。	・事前に設定した個人の目標に対して、評価表（チェック表）を活用し、事前学習や事後学習、繰り返しの指導を行うことで、児童生徒の状況を把握し、指導を行うことができたか。	A: 44% B: 56%	A: 58% B: 32%	A	・地震に関して、年に4回の訓練（繰り返し）により、児童生徒の避難行動に変化や成長がみられた。訓練直前の学習のみならず、児童生徒の発達段階に応じて、指導の仕方や指導場面等を工夫し、意欲的に取り組んだことが、児童生徒の成長につながったと考えられる。	・1回目の訓練で児童生徒の実態を観察し、チェック表を活用・記入し、その実態把握の結果から、個々の目標を設定し、2回目の訓練に臨む（PDCAサイクルの観点）。継続性のある防災教育として実施していく。 ・保護者からの意見に対し検討していくとともに、啓発や説明の場を増やしていく。	
	児童生徒指導部	・自力通学生の通学ルートを把握し、交通ルールや公共交通機関の利用等通学指導を行う。さらに、児童生徒の実態に応じた交通安全指導を行い、児童生徒が自ら身の安全確保を行うことができるようにする。	・立哨指導や自力通学指導、交通安全週間を通して児童生徒の実態に応じた交通安全指導を行い、道路の通行の仕方や交差点の渡り方を身に付けさせることができたか。 ・自力通学生に通学カードや安全マップを活用して電話連絡や建物で身を守る方法を指導し、自発的に適切な行動を取ることができたか。	A: 27% B: 71%	A: 49% B: 36%	B	・交通安全教室では、児童生徒の発達段階に応じた方法で信号機や標識を確認し、交差点を渡ることができた。また、校外学習や徒歩学習を通して道路を通行する経験を積むことができた。 ・自力通学生において、事故が起きたときに通学カードの活用が不十分であった。	・全学部の指導においては、全教員が交通安全週間実施計画等で指導内容を確認し、引き続き発達段階に応じた交通安全教育に取り組む。 ・自力通学生には、通学カードの使用方法について、ロールプレイ等を交えての指導を実態に応じて繰り返し行い、実際の場面で対応できるようにする。	・通学カードについては、事故に遭ったとき、まずは見せることができるようになるという。→ロールプレイ等、指導を行いながら、実践できるようにしていく。
2 児童生徒の自立・社会参加に向けたキャリア教育の充実を図る。 ○卒業後の進路を見据えたキャリア教育のカリキュラムマネジメントを確立する。	進路指導部 キャリア教育推進委員会	・キャリア教育全体計画、キャリア教育到達度チェック表等を基にして、小・中・高、各学部において児童生徒の卒業後の進路を見据えて、目標を掲げることができる。授業の中でそれらを意識して指導し、その後、評価、検証し、実現に向けて改善を図ることができる。	・キャリア教育（爽やかな挨拶、決まりを守る、前向きに歩む、たくましく働く、作業学習、就業体験学習、現場実習、職業等）に関する目標を個別指導計画に反映させることができたか。 ・具体的な学習場面を多く設定することができたか。また、それらの学習の振り返りで、将来像をイメージしながら改善することができたか。	A: 31% B: 67%	A: 60% B: 35%	B	・キャリア教育到達度チェック表を基にして、個別指導計画に反映させることが定着しつつある。 ・挨拶や働くこと等、キャリア教育に関する指導は、各段階で充実しているが、小中高での系統性をより深めることは、課題となっている。	・教職員、保護者へのキャリア教育全体計画の周知をより強化する。 ・これまでに行っていた指導の多くが、キャリア教育に通じているという認識を深めつつ、より具体的な内容を指導計画等に反映させる。 ・各段階でのキャリア教育が目指すところの到達点が、不明確な感が否めない。よって、課題を焦点化し、達成目標を設定する。	・キャリア教育全体計画も到達度チェック表もしっかり作られている。これを基に実践を積みこめて、教員の評価も高くなるだろう。
3 地域と連携した学校作りを推進する。 ○学校の情報提供を行い、開かれた教育課程の実現に努め、地域の教育資源を活かした学習を充実させる。	教務部 IT・視聴覚係	・本校や特別支援教育の理解のために、ホームページのトップページ及び保護者ページの定期的な更新を行い、興味関心につなげる。	・各学年・ブロック、校務分掌等で、月最低1回は記事を更新することができたか。 ・更新情報等を伝え、HPを見てもらう工夫をすることができたか。	A: 36% B: 62%	A: 55% B: 37%	B	・学部としては月1回の更新をすることができたが学年・ブロック単位では難しいところもあった。行事ごとに更新することはできた。 ・HPへのQRコードを作成し配布することができた。HPの更新情報を数回に留まったが出すことができた。	・学年・ブロック等で月の担当者を決め、定期的に更新できるようにする。行事にこだわらず普段の授業の様子など、写真がなくても少しでも更新するように周知する。学部のIT・視聴覚係を中心に定期的に声を掛け更新を促す。 ・月初め等に更新情報を出すようにする。QRコードは、周辺地域等にも配付し興味関心につなげる。	・ホームページから、児童生徒の様子について情報を得ることができている。
	地域支援部	・センターの機能充実事業の研修及び取組について随時ホームページの更新を行う。	・何によって情報を得たか研修後のアンケート等で明らかにする。 ・教材・教具展など研修に関することをUPすることができたか。	A: 43% B: 56%	A: 55% B: 37%	A	・研修後のアンケートで、約30%の方がホームページを見ていることが分かった。 ・研修実施後すぐに更新することができた。	・アンケートは本校の研修のみに実施した。次年度は足利・佐野特別支援教育研修会の事務局になるので、アンケートの中にホームページで本校の情報を得たかどうか確認するようにする。	
	渉外部 地域連携係	・地域連携推進計画に基づいて、地域連携一覧等から地域の教育資源を生かした学習活動を充実させる。	・地域住民や地域の諸団体を招いて各学部で新たな授業等を実施することができたか。	A: 54% B: 41%	A: 54% B: 35%	A	・地域連携係を中心に研修を行い、各学部で計画・時案を作成した。行事や授業等を見直し、地域住民や地域の講師を招いたり、地域に行ったりして地域の教育資源を生かした授業を実施することができた。	・係だけでなく全職員が引き続き地域の教育資源を学習活動に活用していく意識を高め、実践していく。	・住んでいる地域との関わりについて保護者は不安を感じている。→卒業後の生活のためにも、居住地域を含めた地域の理解を深めていく。
4 教職員一人一人が専門性の高い教育に取り組む。 ○学習指導要領の改訂を受けて、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業作りを実践する。	教務部 教育計画係 現職教育係	・授業作りのPDCAサイクルの定着を目指すために、年間2回（～9月、～12月）各学年・ブロック等で授業を公開し、授業研究会を行う。	・授業を参観し、効果的な指導法や課題点を考察することができたか。 ・参観者の意見を聞き、次の授業の展開を検討し改善することができたか。	A: 51% B: 44%	A: 66% B: 25%	A	・ほぼ全教員が公開授業を実施することができた。その後、学年・ブロック等小さな集団ではあるが授業についての話し合いの場を持ち振り返ることができた。課題点に関しては、改善策まで導くことが次の指導へとつながることができた。	・他の教員の授業を参観する時間を作ることが難しかった。そのため授業研究会も授業の担当者など小さな集団での実施になった。公開授業の予定を早めに立て、時間を調整するなど、少しでも生の授業を見ることができるようになる。次年度も最低一人1回の公開授業・授業研究会の流れを継続し、授業作りのPDCAサイクルのさらなる定着を目指す。	
	学習指導部 特別活動部	・児童生徒が自発的・意欲的に取り組める授業作りの工夫・改善を行う。	・PDCAサイクルを展開しながら、効果的・有効な視点や工夫点などを展開計画の評価等で明らかにし、授業改善に活かすことができたか。	A: 32% B: 66%	A: 66% B: 25%	B	・今年度から展開計画に評価の欄を設けた。そのことによりPDCAサイクルのPDCまでを計画的に進めることができた。改善(A)までには至らなかったが、今年度の取組が次年度へ活かされる結果となった。	・次年度は、展開計画の評価(C)で明らかになった効果的・有効な視点や工夫点等を授業改善(A)に活かし、児童生徒が自発的・意欲的に取り組める授業作りに努める。	